

## 宗教的見地から見た

### リーウィウスの第三 Decade

西田 卓生

#### 序

リーウィウスが、ローマ建国以来の特筆すべき出来事やその過程を、1巻毎は勿論、更に5巻毎、10巻毎に完結するように記述したことは、周知の事実である。このことは、リーウィウスが、自分の著作の初めに書いた Praefatio とは別に、21巻や31巻の冒頭部を序文の性格を帯びた文章で書き始めていることから納得できる。従ってリーウィウスの作品構成は、そこに書かれた伝説や歴史的事件に視点を置くと、実に均整がとれているのである。

しかし、リーウィウスの著作の思想的内容やその流れに目を向けたとき、歴史的イベントやその流れとどのような整合性が存在するか、という問題が浮かび上がって来る。

拙論では、ハンニバルとローマとの戦争が主要テーマである第三Decade(21～30巻)を中心に据え、思想的な内容としてこのDecadeに現れた宗教的側面を前面に出して両者の対応関係を示すことを目的とする。

その際一つの方針として、このDecade内の有名な事件、戦闘や、代表的な登場人物に焦点を当てて議論を進めてゆくことにする。その第一の理由として、このDecadeだけでも記述内容が膨大な量にのぼり、細部にまで及ぶ検討は不可能だからであり、第二の理由として、重要な事件や登場人物は、当然作品中で大きな意義を持つし、又リーウィウスは、このような事件や人物に対し必ず深い宗教的位置づけを行っているからである。

ところでこのDecadeの代表的人物として、まずカルタゴ側ではハンニバルである。リーウィウスは、このDecadeでハンニバルに一定の宗教的位置づけをし、ハンニバルは、このDecade全体を通して一貫した宗教的確信を抱いて、戦争を遂行してゆく。これに対してローマ側は、いささか複雑である。ローマからは様々な将軍達が登場し、ハンニバルに戦いを挑むが、その結果も又様々である。そしてリーウィウスも、ローマの将軍達一人一人に宗教的位置づけを行っているが、注目すべき点として、彼等一人一人とハンニバルとの戦闘の結果、即ち勝敗は、彼等とハンニバルとの内面的宗教的戦いの勝敗である、との様相を呈しているのである。故にハンニバルに対し最終的な勝利をザマの戦いで収めたスキピオーは、又宗教的な面でもハンニバルを凌駕していたのである。即ち戦争という外面的な事件と宗教性という内面性質が対応し、そこに整合性が見いだせるのである。

この点に留意しつつ、*fatum*, *fortuna*, *prodigium* といった宗教的事項にも触れながら、第三Decadeの内容を順次できるだけ具体的に考察してゆくことにする。

## 1章

ハンニバルは、少年の頃カルタゴを去り、父ハミルカルに連れられてヒスパニアに渡り、そこで成長した。やがて軍の指揮権を手中に収めたハンニバルが、ヒスパニアにあるローマとカルタゴの中立都市サグントゥムを攻略し、ローマ側からの抗議をも一蹴してエプロ川を渡河して北上する。こうして第二次ポエニ戦争の火蓋が切られる。その後ハンニバルの軍とローマ軍とが幾度も戦闘を重ね、ザマの決戦でローマが最終的勝利を達成するまでの内容が、このDecadeの主題である。

まずリーウィウスは、サグントウムの攻防を記述する前に、21巻4章でハンニバルの人物描写を行っている。そこでは、ハンニバルの美德(virtus)と悪徳(vitium)とが分けて整理されている。リーウィウスは、彼の美德として、粗食や不眠に耐え、暑さ寒さにも動じないといった肉体的強靱さや、常に自分の部下達と寝食を共にし、戦いでは自ら先頭にたった闘う勇敢さ、そして危機的な状況下でも思慮分別を失わない精神面の強さなどを強調している。これらは、一人の人間としてのハンニバルの優れた資質である。一方悪徳として、彼の残酷性の他、fides、神々、誓約などに対して畏怖の念が欠如していること、言い換えれば、ハンニバルが直接神々と密接な関係にはないか、少なくともハンニバルは、そのような関係を念頭に置いていない、といったことをリーウィウスは指摘している。ハンニバルのこの人物描写は、やや偏見に満ちていると思われるが、リーウィウスが、自分の著作で、ハンニバルという第三Decadeに於ける中心的人物の両面を上記のように設定したことは、今後の考察にも重要な意味を持つ。何故ならハンニバルは、自分の美德を最大限に発揮して大きな戦闘に勝利を次々と収めてゆくが、自分の悪徳が原因となって最終的に敗北するからである。

さてここでこの第三Decadeの底流を為す重要な陳述に触れなければならない。それは、サグントウム攻略後に、ハンニバルが彼の父ハミルカルとローマが以前に締結した条約に違反したと抗議する為にカルタゴにやって来たローマの使節を迎えて、反バルカ勢力の筆頭であるハンノーが行った反戦演説の中に含まれている。

21,10,5:Saguntum vestri circumsedent exercitus unde arcentur foedere; mox Carthaginem circumsedebunt Romanae legiones ducibus iisdem dis perquos priore bello rupta foedera sunt ulti.

即ちハンノーは、神々の名に於いて締結された条約を破ってハンニバルが始め

た戦争は、その同じ神々の指導の下で進行し、そして終結すると述べている。リーウィウスは、この戦争が神々の支配下にあるという重要な設定を行っており、結局第三Decadeに現れる様々な宗教的要素は、神々に従属するのである。従って、神意に叶う者が勝利を獲得することになる。そしてその者はスキープオーである。

次にこの第三Decadeのうち最初のPentade(21-25巻)で起こる戦いの結果や事件の流れを暗示する宗教的な要素として、ハンニバルの夢(21,22,6-9)が、重要な意義を持つ。ユピテルから遣わされた若者が、神の姿をしてハンニバルの夢枕に立つ。その若者は、決して後を振り向かないようにハンニバルに告げ、ハンニバルをイタリアへ導く。しかしハンニバルは我慢できなくなり後を振り向くと、巨大な蛇がとぐろを巻いており、その周囲では樹木が薙ぎ倒されて、雷鳴が轟く。それらは何かとハンニバルが若者に尋ねると、イタリアの荒廃した姿だと若者が答える。ところがリーウィウスは、この夢を次の文で締め括る。

pergeret porro ire nec ultra inquireret sineretque fata in occulto esse.

結局夢に現れた若者は、ただハンニバルをイタリアへ導くだけであり、予言めいた事柄は、上記のようにほんの少ししか語らない。そして引用したラテン文から判るように、fata は隠されている、言い換えれば、最終的な結果、即ちローマ軍の勝利は見えないのである。又、多少問題は有ろうが、fatum をユピテルの意志と解釈すれば、その意志も隠されていることになる。しかし歴史を知っている我々にとっては、ハンニバルの夢が、この戦争の初期にハンニバル軍がローマ軍に対して収めた連戦連勝（やや先細りの感はあるが）を暗示していることは、すぐに納得できる。

ところでこのハンニバルの夢は、リーウィウスのオリジナルではなく、既に以前の著述家によっても記されている。例えば、キケロの著作を通じて<sup>(1)</sup>、コ

エリウスやシレーヌスが書いたハンニバルの夢の概要を知ることができる。彼等のヴァージョンによるハンニバルの夢の場合、ハンニバルが神々の集會に呼び出されユピテルがハンニバルに戦線をイタリアへ持ち込むよう命令する。これと比較すると、リーウィウスは、叙事詩的夢解釈ではなく、歴史文学の一環として、ハンニバルの夢を考えるよう読者に促しているようである。何故なら、まずユピテル自身夢に姿を現すことはない。歴史叙述家としてのリーウィウスは、こういった寓話的要素を意図的に排除しているようである。更にこの夢が語られたその前後の事件を考えると、リーウィウスはこの夢の配置にも苦心していると思われる。まずこの夢は、サグントゥム陥落の後で語られており、そしてハミルカルとローマとが締結した条約に確実に違反する行為であり、本当の意味で開戦とも言える、ハンニバルのエプロ川の渡河の前に語られている点を考慮すると、事件の流れに於いて歴史文学的効果を、この夢は十分に有する。しかし、ハンニバルに禁止されていた後を振り向くという行為をハンニバルが行ったため、*fata* が隠されたと解釈すれば、この夢は、やや叙事詩的或は寓話的要素を含んでいることになる。

以上この章では、ハンニバルの人物描写、ハンノーの演説、ハンニバルの夢という三つの話題を取り上げた。これらはそれぞれ、第三Decade全体を考えてゆく上で重要な内容を持っている。まずハンニバルの人物描写は、第三Decadeに於ける最も重要で代表的な人間の人物像を宗教的にも確定している。ハンノーの演説は、やはり第三Decadeのハンニバルとローマとの戦争全体を宗教的に性格づけると言う点で深い意義を持つ。ハンニバルの夢は、第三Decadeの中の前半のPentadeの内容、事件の進行を暗示すると共に、隠された*fata*が、後半のPentadeで徐々に明らかになってゆくという点で重要である。そしてこれらの話題は、リーウィウスが本格的に第二次ポエニ戦争を記述する前に、戦争全体に関する一つの宗教的設定、敢えて言えば初期設定を行った、という性格を持つ

のではないかと私は考える。これらは、今後第三Decadeを考へてゆく上で一つの基準となるだろう。

## 2章

### 前半のPentade

エプロ河を渡り、有名なアルプス越えを完了したハンニバルとその軍隊は、イタリアのロンバルディア平原に出て、ローマ軍との最初の戦闘に直面する。それは、ティキヌスの戦いであり、小競合を除けば、次にトレビアの戦い、そしてトラシメヌス湖畔の戦いと続く。そしてローマ軍との最初の戦闘を前にしてハンニバルは、兵士達に対し演説(21, 43, 2ff)を行う。兵士達に、戦って勝つ以外に自分達の活路はないと説き、兵士達の精神状態を極限にまで追いやる。

この弁論を読むと、まず fortuna にハンニバルが頻りに言及していることに気づく。fortuna 以外に超自然的な力としてこの弁論に登場するのは神々だけである。そしてこの弁論で、ハンニバルの宗教的側面の一端が露呈している。まず戦いを前にして兵士達の精神状態を異常なまでに高揚させる為、ハンニバルは fortuna を持ち出す一方で、既述のハンニバルの人物描写から考えると、ハンニバル自身はむしろ自分の力に依存しているという印象を与えている。又、ハンニバルは、兵士達の virtus を助長する場合にのみ神々を引き合いに出しているようである。

この弁論では、fortuna は神々と従属関係にあるというよりは、むしろ対照を為していると解釈できる。リーウィウスは次のような文を書いている、*— velut dis auctoribus in spem suam acceptis*。これは皮肉とともに取れ、表面的には自らの力に依存する傾向の強いハンニバルが、神々について言及し、更にローマに対する自分の怒りを正当化したり、正義云々と述べている箇所を読

むと、流神的に感ぜられる。実はハンニバルは、*fortuna* に身を託しているのである。このことは、30巻でハンニバルがスキピオーに対して行う弁論の内容からもわかる。但しその *fortuna* は、弁論の中で頻繁にハンニバルが言及しているものとは少し異なっている。ハンニバルが自分の身を託した *fortuna* の性格は、事件の進行と共に徐々に明らかになってゆく。

いずれにせよ、ティキヌスの戦いの前のハンニバルの弁論から帰納し得るハンニバルの内面的或は宗教的な性格は、第三Decadeの中でほぼ不変で且つ一貫して流れている。リーウィウスが、この第三Decadeで記述した内容とは、ハンニバルという一人の人物と、彼に対抗するローマの複数の将軍達を巡る史実、戦争などの流れであると極論できると私は思う。そしてハンニバルという一人の人物の不変的な宗教性に対するローマ側の将軍達が一人一人持つ様々な宗教性との内面的戦いという側面を、この第三Decadeにリーウィウスは設定したと考えられるのである。

事実ティキヌスの戦いでハンニバルに最初に対抗したローマの将軍スキピオー（アフリカーヌスの父）の弁論(21,40.1ff)は、凡庸で典型的なローマの伝統的立場や考え方を反映しているだけであって、*virtus* が *fortuna* を支配して、戦いの勝敗やローマの宿命を決定すると主張している。そして戦いは、ハンニバルが前面に持ち出した *fortuna* と、スキピオー（アフリカーヌスの父）が前面に持ち出した *virtus* との対決という図式となり、結果は、周知の通り、*fortuna* に軍配が上がる。そして次々とハンニバルに対抗して来る将軍達は、それぞれ異なった宗教性を以って戦いを挑んでくるのである。

ところでティキヌスの戦いを前にしたスキピオー（アフリカーヌスの父）の弁論には、注目すべき一節が含まれている。

21,40,11: Sed ita forsitan decuit cum foederum ruptore duce ac

populo deos ipsos sine ulla humana ope committere ac profligare bellum, nos, qui secundum deos violati sumus, commissum ac profli-gatum conficere.

ここに呈示された考え方は、本質的に一章で取り上げたハンノーの考え方と同じであり、即ちこの戦争は、条約違反を絡めて、神々の指導と意志の下で進行し終結するとの考え方である。ハンニバルは、この考え方に関知しておらず、これが彼の弱点ともなる。こういった一種の宗教性も、他の様々な要素を取り込んで、30巻へと収束してゆくのである。

#### prodigium とローマ軍の敗北

まず古代の歴史著作の中に prodigium が書き込まれた本来の意味を明らかにすべきだと思う。歴史を記述する際、そこに prodigium を書き込むことは、現代の合理主義的歴史家からの非難の的となるだけである。しかしリーウィウスが、prodigium などの超自然的な現象を自分の著作に書き込んだことには正当な理由がある。当時のローマでは、占術などを含めてそれらは広く信じられ、行為の責任ある行政官や軍の指揮官は、それらの現象に対して公的に且つ適切に対処せねばならなかった<sup>(2)</sup>。ローマ建国当初からの歴史を書いたリーウィウスにとって、自分の著作から prodigium を排除することは、即ち歴史に於ける置ける重要な部分を省略することに等しかったと考えられる。これが、リーウィウスが prodigium を記述した基本的な第一の理由と考えられるが、その他の理由として、恐らくリーウィウスが自分の著作を書く際、資料として参照したであろうと認められているアンティアスやポリュビオスなどの作品中にそれらが書かれていて、リーウィウスがそれらをそのまま記述したとも考えられる。



この場合、リーウィウスは、結果的にヘレニズム趣味に影響されたことになる。又、文学的効果を高める為に書き込んだとも考えられよう。更にその延長として、宗教的な感情や雰囲気高めることを狙ったようにも思われる。事実素朴な読者に対して prodigium は、一種独特な雰囲気と高揚感を提供してくれるのである。一方リーウィウスが、prodigium に対して批判的な面を持っていたことは言うまでもない<sup>(3)</sup>。

さて歴史的事実に戻ると、ローマ軍は、ティキヌスとそれに続くトレビアの戦いでハンニバルに敗北を喫した。この事実は、1章のハンニバルの夢から判断すると当然である。それは最終的結果は隠されていたが、少なくともイタリアの荒廃を暗示していたからである。又ハンノーやスキープオー（アフリカーヌスの父）の陳述から判断すると、この敗北は神意ということになる。ローマは神々に守られているから、敗北はあり得ないと考えるのは誤りである。第一 Decade を読むと判るように、そこでは神々は、ローマを世界の指導者にする為にローマに様々な試練を与えているのである。

しかし、ハンノーやスキープオー（アフリカーヌスの父）の陳述がなくとも、ローマが常に神々の保護下に有るとするのは、ローマの伝統的な考え方である。ここでその神意と敗北との関係はどうなっているかという問題が、新たに生ずる。神意の不可知性を主張すれば、後期ストア主義者という一面を持っていたリーウィウスの考えに反する。そこで神意を知る一つの手掛かりが、prodigium ということになる。しかし prodigium は、単なる現象にすぎず、例えば、21,46,1-2 の prodigium は、ローマの敗戦という結果からみれば、意義を持つが、歴史はそんなことに顧慮せず進行してゆく。その prodigium は、神々の怒りとして現れたが、その怒りの原因をリーウィウスは説明できないでいる。結局これらの宗教的要素と史実が複雑に入り組んだ中で大きな出来事を描く為の抜け道は、事件の宗教性を離れて、飽くまで人間界の出来事として描くことで

ある。事実リーウィウスは、ティキヌスとトレビアの戦いの敗北の原因を人間界のこととして描き、トレビアの敗北の場合は、センプローニウス＝ロングスの *ferocia* と、*consilium* と *virtus* の欠如をその原因としている。

21,46,1-2のように *prodigium* が神々の怒りとして現れたものなら、当然贖罪の儀式を取り行わなければならない。事実行われたが、それに引き続いた有名なトラシメヌス湖畔でのローマ軍の敗北を考えると、贖罪が不十分だったのである。

しかし21～22巻の部分でリーウィウスは、*prodigium* を文学的効果を狙って記述していると思われる。21,63,13-14に書かれた、犠牲を捧げる際に起こった珍事につき、民衆はそれを不吉な前兆と考える。その事件の下で執政官フラミニウスは、トラシメヌスの戦いへと出征して行く。そして22,1,5ffで至る所から *prodigium* が報告され、トラシメヌスの戦いの迫り来る危機を知らしめているが、この際リーウィウスが行った *prodigium* の配置は絶妙である。218 B.C と 217 B.C.に報告されたり起こった一連の前兆を、巻は飛び越えているが、できるだけ近くに配置し、これらの *prodigium* が単に贖罪の儀式では晴らされない重大なものであることを印象づけている。だがその神の怒りが何であるのか、リーウィウスはあまり積極的に説明していないし、又説明を行ったとしても曖昧である。後にリーウィウスは、これら *prodigium* をフラミニウスの傲慢さや神々に対する *neglegentia* と結びつけ<sup>(4)</sup>、その執政官の行動を危険で良識のないもののように描いている。次のフラミニウスを描写した文は強烈である。フラミニウスは、'*non modo legum aut patrum maiestatis sed ne deorum quidem satis metuens*'とリーウィウスは書いている(21,3,4)。

他にもリーウィウスは、フラミニウスの性格や言動の中に、既に敗戦を予兆する多くの記述を、*prodigium* とは別に行っている。代表的な例を挙げると、アッレティウムを前にした作戦会議で、執政官フラミニウスは、もう一人の

執政官が到着するのを待ち、早まってハンニバルに戦いを挑まないように忠告される。激怒したフラミニウスは、次のように叫ぶ、

2,3,10; 'Immo Arreti ante moenia sedeamus'

'hic enim patria et penates'

この言葉の流神性は強い。フラミニウスは祖国のペナテスを侮っているのである。フラミニウスに内在するこのような *feroica* や *temeritas* は、神々や *fortuna* とどのような関係にあるのか、次のフラミニウスの言葉が暗示している。

22,5,2: 'nec enim inde votis aut imploratione deum sed vi ac virtute evadendum esse'

トラシメヌスの戦いの後に登場するファビウスと比較すると、明らかにこの言葉は、*ratio* と *pietas* を欠いており、*virtus* と *ferocia* が混同されている。そして人間界と *virtus* に対するフラミニウスの盲目さは、神々と *pietas* に対する彼の盲目さと対応している。ストア主義的見地に立てば、それは神や世界秩序と不協和音を発する言葉なのである。いずれにせよハンノーの言葉と同時に、ハンニバルの夢が、厳格なストア主義者が考えるように成就されてゆくだけである。

#### fortuna と fatum の問題、及び Cannae の戦い

トラシメヌスの戦いもローマの敗戦に終わり、次に独裁官ファビウスが登場する。彼は、うち続く敗戦を、将軍達が *ratio* ではなく *fortuna* に身を委ねた無思慮に起因せしめている。又ファビウス自身も、必然性が強要しない限り、決して *fortuna* に依存せず、*ratio* に基づいて行動している。ハンニバルに対し持久戦を取るファビウスは戦闘を挑む前に、*ratio* に従って、至る所の地形

調査などさせている(22,12,2)。

これに対して、ファビウスの副官のミヌキウスは、ファビウスの方針に不満を抱き、ファビウスがこのような作戦を続けるならば、自分は fortuna に従うと述べている(22,27,4)。一方ファビウスも、ミヌキウスの言うような行動を取れば、ハンニバルとの戦いに於いて重大な危機を招くことを感じている(22,29,1ff)。

このようなファビウスとミヌキウス、更にウァッローらとの確執から判断して、リーウィウスは、良かれ悪しかれ fortuna は、歴史に於ける極めて重要な要素と考えている。

ここで fortuna/tyche に関する深い意味やその由来についての考察は省略するが、その言葉は極めて多様な側面を持っており、意味を確定するのは非常に困難な場合が多い。Fortuna は、ローマに於いては、元来エトルリア起源で、女神として崇拝されていた。ホラーティウスの『カルミナ』1,35で Fortuna の活動領域の多種多様性が示されている。更にリーウィウスの時代には、ヘレニズム世界の tyche の持つ意味が加わった。その tyche できさえ、古典期ギリシアからヘレニズム期へと年代を経るにつれて、様々な意味を取り込み、例えば、tycheに多くの重要な活動の場を与えたポリュピオスの著作できさえ一つの確定された意味では現れず、しかも歴史の中での作用形式も雑多である<sup>(5)</sup>。もはや哲学や宗教に関する厳密な意味をこの言葉に託すのは不可能になっていたのである。

リーウィウスの場合も、fortuna が単なる常套句として使用されている箇所も多いのだが、fortuna には大きく分けて、積極的面と消極的面がある。消極的面は、ファビウスの陳述や fortuna に身を託したローマの将軍達の敗北で明らかである。一方ハンニバルが自ら身を委ねている fortuna は、ハンニバルや彼の部下達を勇敢さや頭脳の冴えの極へ追い込み、それらの能力を最大限に発

揮させるといふ肯定的面を持っている。ハンニバルは、この肯定的 fortuna に裏付けされた自己の力を発揮して、ザマの戦いまで戦争を続ける。

さてリーウィウスに於ける fortuna と、virtus や ratio の関係について多少考察する。ローマ人の考え方の典型として、‘fortis fortuna iuvat’ という句が有る。これはハンニバルの fortuna にも当てはまるだろうし、実際リーウィウスの著作にも2度は現れている(8,29,5; 34,37,4)。それは、固有の力である virtus を fortuna の上に置こうとする志向性を感じさせる。そしてこの virtus が fortuna 以上に決定的な力であるとの主張や暗示は、リーウィウス以外にも、ウェルギリウスの『アエネーイス』2,435ffなどに見出せる。リーウィウスの著作が、文字通り res gestae の歴史とすれば、当然 fortuna よりも virtus の方が、直接的に表面に表れるものとして肯定的重要性を帯びるのだが、リーウィウスがかくも頻繁に fortuna を著作に導入しているのはなぜかと言う問題に関して、まず当時の流行であったとも考えられるが、セネカの言葉のように<sup>(6)</sup>、リーウィウスが単なる歴史家ではなかったということを考慮すべきであろう。Walsh は<sup>(7)</sup>、リーウィウスのストア主義的面を強調しており、ストア主義者達は、fortuna に対して virtus や ratio は独立したものと考えていたし、Stüblerの指摘<sup>(8)</sup>に依れば、ファビウスとミヌキウス等に代表される ratio 対 fortuna という関係は、該当する時代を扱ったアッピアーノスやポリュビオスにはない、リーウィウス独自のものである。

問題は多く残り、更に深い考察が必要だろうが、私の考えでは、やはりこの第三Decade全体の流れの中で対処すべきであろう。fortuna は本来偶然性なのであり、ハンニバルとの戦争では、fortuna より ratio の方が好ましいが、両者は本来独立したものであり、持久戦でハンニバルに勝利はしなかったが、ハンニバルに敗北することだけは辛うじて防いだファビウスの言う ratio は、少なくとも内面の戦いに於いて、ハンニバルの肯定的 fortuna に近いレベルに達

しつづつあるものだったのだろう。virtus も本来独立したものとリーウィウスは考えていただろうが、fortuna との相互作用により強化されるものとしてリーウィウスは描いているようである。いずれにせよ、移ろい易い fortuna をファビウスがいかにかたく拒否していたかは、22,10,2; 22,29,1ffなどの箇所によく表れている。

カンナエの戦いの2日前、ウァッローは、好ましくない前兆があったので、苦勞して退却した。しかし軍隊をもはや停止させることはできず、執政官の命令にも従わないという状況の下で、2人の奴隷が敵の伏兵を報告する。その事件の記述の直前に、リーウィウスは次のように書いている。

22,42,10; Di prope ipsi eo die magis distulere quem prohibere iminentem pestem Romanis;

ここで疫病は、結果的にはカンナエでのローマ軍の大敗北を意味しているのだろう<sup>(9)</sup>。しかし既に prodigium が、22,36,6-8で報告されている。そこで当然のこととして贖罪の儀式が行われたが、戦いの結果が示すように、神の怒りは消えず、贖罪は不充分であった。そこで敗戦の後、デルフォイ神殿に伺いを立てることになる。ファビウス=ピクトルが派遣される(22,57,5)。

しかしこのように決定的な事件には、fatum が作用している。

22,43,9; ex maioris partis sententia ad nobilitandas clade Romana Cannas urgente fato profecti sunt.

しかしカンナエの戦いで、ローマ軍の指揮官ウァッローを精神的盲目に追い込んだのは、fatum ではなく、神々と考えた方がよかろう。理由として、第一にハンノーの言葉に叶うからである。第二にカンナエの戦い及びその前後の人間達の言動を、リーウィウスが高所からみているような描写が続いている。これは、我々同様リーウィウスも、戦いの過程と結果を知っていたという利点もあ

るだろう。第三に、第一Decadeで、ローマの建国、発展及びその試練に神々と共に作用していたストア主義的な fatum は、第三Decadeでは、その意義が多少ではあるが、薄れていると考えられる。又第三Decadeが、第一Decadeほどには伝説的要素が多くないこと、又、第一Decadeほどにはストア主義的目的論的記述が必要ではなくなったこともある。事実 Iro Kajanto は<sup>(10)</sup>、第一Decadeと第三Decadeでの fatum が現れる頻度を数え、fortuna は殆ど変化がないのに、fatum が第三Decadeで第一Decadeに比べて減少している点を指摘している。従って又、神の最高意志と同等化された fatum も減少しているだろう。しかし fatum の持つ重要な意義は、第三Decadeでも、例えばハンニバルの夢などで理解される。未だその夢の fatum は隠されている。

以上、prodigium や fortuna, fatum などを含めて、第三Decade の前半の Pentadeを大雑把に考察した。ここで明白なことは、まず予言的な暗示を含むハンニバルの夢がこのPentadeを支配している点であり、当然その夢で隠されていた fatum は、後半のPentadeで明らかになるということになる。

次にティキヌスの戦いの前のハンニバルの演説や、その後の流れから判断して、ハンニバルは fortuna に裏付けされた自己の力を最大限発揮しており、ハンニバルの fortuna は、極めて肯定的面が強いことがわかる。それは、同じく fortuna に依存したローマの将軍達がハンニバルから喫した一連の敗北を見れば納得できる。即ちこれらの戦いは、ハンニバルの fortuna がローマ側の fortuna に対して勝利を収めているからである。

又ハンニバルは、ハンノーが述べたように最も高い位置から神々が、fortuna や戦争をも支配していることに関知していない。従ってもし神々と親密な関係にあり、又神々によって強く鼓舞された将軍であれば、ハンニバルを打ち負かすことができたであろう。しかしフラミニウスの場合、その神々をも疎か

にした為、ハンニバルを宗教性でも上回る事ができず、トラシメヌスの戦いで敗北すると共に自らも戦死した。

カンナエの戦いでは、ハンニバルの夢の通りの結果になり、*fatum* はまだ隠されたままであった。又ローマの将軍達は、ここでもハンニバルの *fortuna* に勝てなかった。

ファビウスは、*ratio* で辛うじてハンニバルの勢いを食い止めたが、ハンニバルも、リーウィウスが行った彼の人物描写の中で判るように、優れた *consilium* を持っており、ファビウスもこれらの属性に於いてハンニバルに優ることはできなかった。

リーウィウスは、前半のPentadeで歴史的流れや戦いの結果の裏に、このような内面的な流れを想定していたのではないだろうか。しかしローマ側では、登場人物の宗教性も徐々に高まって来るのである。

### 3章

#### 後半の Pentade

前半のPentadeでは、イタリアの荒廃、即ちハンニバルの勝利を、リーウィウスが、ハンニバルの夢の中で超自然的な形で示したが、後半のPentade(26~30巻)でもローマに最終的勝利をもたらすザマの戦いへ向けて、スキープオーの登場という事件を、リーウィウスはあたかも宗教劇のように取り扱っている。ハンニバルが、カンナエの大勝利の後ローマ攻略に踏み出さず、やや行動が停滞気味なのに対して、スキープオーがヒスパニア方面指揮官に若冠 24 才で選出されるという事件(26,18)が、ハンニバルの行動に対置されるかのように、超自然的様式で描かれている。

この事件は 26,18,7 に描かれており、*cum inversum* と *subito* という副詞



を遣って実に巧みに組み立てられた文の次に、

In quem postquam omnium ora conversa sunt, clamore ac favore ominati  
extemplo sunt felix faustumque imperium.

という文が続き、スキープオーの選出は、宿命により定められた指揮官の、神の助力による誕生として宗教的充足感を以って記述されている。それは選出に当たり、民衆の気持ちが一瞬一致した結果であり、民衆の心の中を瞬間的に神性が駆け抜けた奇蹟といった様相を呈し、‘ominati’という語がそれを強めている。要するにリーウィウスは、スキープオーの選出に神の作用という宗教性を認めたとか、或は逆に宗教性を感じさせる描写をリーウィウスが行ったかのいずれかであろう<sup>(11)</sup>。

しかし民衆の熱狂はすぐに醒め、スキープオーの年齢が若すぎることや、彼の父や伯父がハンニバルとの戦いで戦死していることなどを想起し、民衆は不安にかられる。これに対しスキープオーは、

advocata contione ita de aetate sua imperioque ...deseruit ... (26,  
19,1ff)

により対処する。そしてスキープオーは民衆に向けて弁論を行い、民心を安定させる。この描写の順序を別の著述家と比べてみると、例えばアッピアーノスは、スキープオーの選出を記述する際、まずスキープオーの弁論を先に置き、その中でスキープオーは自分の父や伯父の死について語り、その復讐を成し遂げる意志を明らかにし、それがやがてローマの勝利に通ずると述べる。この順序の場合、民衆達にも又我々読者にも、次にはスキープオーが指揮官に選出されるとの印象を与えてしまい、リーウィウスの描写のような宗教劇的效果は薄れてしまう。この点を考えると、リーウィウスは、意図的にスキープオーの弁論を彼の選出の後に置いたと考えられる。

結局リーウィウスの狙いは、スキープオーの神性を強調することにあつたと

思われる。そしてスキープオーの選出は、民衆の軽挙妄動ではないのである。スキープオーの登場は、神意による神がかり的なものであり、従ってスキープオーという人物は、もちろん神ではないが、神と密接な関係にある人間であるとの一つの設定が為されている。ハンニバルが神と親密な関係にないという人物設定と好対照をなす。更にスキープオーを巡る幾つかの伝説が有ったようである。例えば、スキープオーの誕生にまつわるものがあり、リーウィウスの著作にも見うけられる(26,19,6~9)。これは、スキープオーの母親の寝室に蛇に化けたユピテルが居たというもので、するとスキープオーの父親はユピテルということになる。但しこれもリーウィウスのオリジナルではなく、以前からこの伝説は存在していた。

第三 Decade の前半の Pentade に現れた様々な要素が、後半の Pentade へ流れ込んでくる。そして拙論の1章で述べたハンノーの陳述やハンニバルの夢が、この Decade や各 Pentade 全体を考える際重要な1つの基準になったように、このスキープオーの登場及び彼が神々と親密な関係にあるという(或はそう見える)設定は、前半の Pentade の流れを変える転機であると同時に後半の Pentade を考えてゆく上で重要な意義をもっている。

### ファビウスとスキープオー

(28、40~44)

カルタゴ=ノウァを陥落させた後、スキープオーは、ハンニバルとの決戦の場をアフリカに求めようとする。スキープオーのこの決断は、事態の新たな展開に至り、戦争の結果からみても重大な意義をもつ。そしてこの決断に対し元老院から強引に賛同を引き出すまで圧力をかけ続ける。リーウィウスは、この時に元老院擁護派で既に登場している長老のファビウスの弁論と対を為す形で、

スキピオの弁論を記述している。戦線をアフリカに持ち込もうとするスキピオの提案の是非に関する作戦上の両者の対立と同時に、内面的には両者の宗教的対立も明らかにしてくれる。

弁論の要点をまとめると、ファビウスの陳述では、*temeritas* への非難が抜きん出ている。スキピオに警告して、

28,42,7: 'non semper temeritas est felix'

そして武運の移ろい易さを強調し、次にスキピオの父や伯父の戦死を想起させている。さらに海をわたり外地で敗北を喫したレグルスを引き合いに出す。特に武運の無常性に関するファビウスの発言は、30巻のザマの戦いの前にハンニバルがスキピオに対し述べるせりふと極めてよく似ている。ファビウスもハンニバル同様スキピオを諫めるような、やや誘導的な陳述に執着している。両者ともこの若き有能な將軍を、彼の立つやや神性を帯びた高みから平凡な人間界へ引き降ろそうとしており、その為 *fortuna* を持ち出し、それに頼ることの軽率さを説く。結局ファビウスは、かつて彼がムニキウスやウァッローに対して行った弁論内容(22,25)と同じ非難をスキピオに対して行っている。要するにファビウスの主張の核心は、將軍は *fortuna* ではなく理性 (*ratio*) に依存すべきであるということである。

しかし既にスキピオの選出の場面から判るように、リーウィウスは、スキピオに特別な性格を与えており、それは、ロームルスやアウグストゥスにも共通するものである。それは、神との密接な関係である。従ってスキピオは、卓越した軍指揮官として、フラミニウスやウァッロー達の上に位するだけでなく、全人格的にみた場合、ファビウスさえ凌駕している。そしてスキピオは、他の登場人物とは別の法則に従っており、神的な域にまで高められているのである。ここにスキピオが第三 Decade で占める重要な意義がある。スキピオは、原罪を負うた罪深いローマに対して次々に課される

試練の救済者の一人として神性を帯び、ファビウスの言う ratio や他の説教などもものともしない。何故ならスキープオーは、fortuna や ratio などすべてを支配する神と密接な関係を確保したからである。

時代は逆行するが、(26,41,9)で、既にヒスパニア奪還のために当地に出向いたスキープオーは、兵士達に次のように述べている。

sed ut familiaris paene orbitas ac solitudo frangit animum, ita publica cum fortunatum virtus desperare de summa rerum prohibet. Ea fato quodam data nobis sors est ut magnis omnis bellis victi vicerimus.

この文から fortuna populi Romani が、スキープオーを彼の親族の死という絶望から守り、今や fortuna は、ハンニバルの条約違反に対して復讐する神々と共に、ハンニバルの極めて肯定的面の強い fortuna にも勝利を得るという確信をスキープオーに与えている。そして既に戦況が明らかになると同時に、ハンニバルの夢で隠されていた fatum（上記の引用文で fato quodam に該当する）の秘密が、即ち敗戦のみならず勝利の秘密が徐々に明らかになってくる。そしてスキープオーの心中でも、彼を取り巻く雰囲気の中にも、この戦争で自分達が勝利を収めるという宗教的確信が高揚してくる。アフリカにローマ軍の戦線を展開することは、カルタゴと同様ローマにとっても等しい危険を伴う計画であるが、スキープオーが下した決断は、そのときまで背後に隠れていた神への信仰上の根拠に基づいており、その信仰は、勝利を約束し実現してゆく内面的な力となってスキープオーに作用する。そして信仰に裏づけされた確信により、スキープオーは同時に予言者としての側面も兼ね備えることとなった。

このような過程は、一種の内面的宗教的ドラマになっている。最初は凡庸な

virtus や fortuna、そしてファビウスの ratio、スキープオーの神性という具合に、ローマの将軍たちの内面性は、登場人物の順に高まってゆく。

#### 4章

##### ザマの戦いを前にした

##### ハンニバルとスキープオーの会談

第三 Decade を締め括り且つ第二次ポエニ戦争を締め括るザマの戦いを前にして、対を為す二人の弁論は、宗教的精神的な戦であると同時に、その結末という要素を持つ。この長期に亘る戦争の外面的な戦闘の結果や事件の流れと共に、両者が経験してきた、神々や fatum, fortuna をも取り込んだ内面的葛藤の結果、両者の言葉には特別な重み感ぜられる。しかし、弁論の長さやその内容から、我々はむしろハンニバルの弁論に興味を抱く。

30, 30, 3で最初にハンニバルは、自分の好ましからざる状況を明らかにする。fatum に定められた戦争を始めたハンニバルが、いま和平を相手に求めなければならない。この陳述は、かつてハンニバルが攻撃者として誇らしく語った弁論 (21, 43) と著しい対照を為している。これは宿命である。ハンニバルの夢で fatum は隠されていたが、すると逆に考えて、明かとなっていたイタリアの荒廃、ハンニバルが戦線をイタリアへ展開したことも又宿命であったと解釈できるからである。そしてハンニバルは、自分とスキープオーの因果を語る。最初に戦闘を交えた将軍の息子にハンニバルは和平を請うており、これを彼は運命の皮肉と言っている。

30, 30, 5; hoc quoque ludibrium casus edederit fortuna...

まさにハンニバルが、戦争当初から身を委ねてきた fortuna の皮肉であるが、この皮肉は今やそれ以上の意義を持っている。21, 40, 11で先に引用したスキー

ピオー（アフリカーヌスの父）が述べた事やハンノーの演説の内容が真実となったのである。条約違反というハンニバルの神々に対する罪により確定した事件の流れが完了し、作品構成から言えば、第三 Decade のサイクルが完了したのである。当然、ハンニバルの夢の中で隠されていた部分が殆ど明るみに晒された。

更にハンニバルは、神々や *fatum*, *fortuna* について多くの言及をする。例えば、勝利は神から与えられるもの（§4）、神々が我々の祖先に、各々イタリアないしカルタゴで満足するという考え方を与えていればよかった（§6）、神はローマ人達に外国をも支配させることを思いついた（§16）、もし神々が順境にあっても良識ある考えを与えてくれれば、過去のみならず、将来起こり得ることも我々は考慮したのであろう（§16）と。ハンニバルは、最後に神々の嫉妬について語る。

これらの一連の陳述には、多少矛盾もあるが、その目的は、要するにスキープオーに戦闘を思い留ませようとしているのである。勝利は神々の手中にあり、神々が与える *fortuna* を受けるべきであるともハンニバルは述べている。ハンニバルが、神々について述べることには、我々はやや違和感を抱く。ハンニバルは、スキープオーのように神々と親密な関係にはないからである。しかしもしハンニバルが、スキープオーと神々との親密な関係を知って述べているのであれば、多少納得はできる。むしろハンニバルの矛盾を含んだ主張は、ハンニバルの宗教に対する盲目性に根ざしている。即ち、上記のように、*fortuna* は神々から発する、*fortuna* は神々に従属するという主旨の発言をしておきながら、ハンニバルは次のような事を述べている。

30,30,12; *Vixdum militari aetate imperio accepto omnia audacissime incipientem nusquam fefellit fortuna.*

この文は、ハンニバルの宗教性を測る上で中核をなすものである。ここでハン

ニバルは、ratio や fortuna の上に第三の力、即ち神々の存在を知らず、むしろ彼は、神々を fortuna と同等化して考えているのである。ハンニバルの宗教的盲目性の一例と言えよう。

又リーウィウスが、ハンニバル像を多少変えたとも考えられる。ハンニバルが弱気になっていることを示す、やや独自性を帯びた陳述がある。

30,30,10; Quod ad me attinet, iam aetas senem in patriam revertentem unde puer profectus sum, iam secundae, iam adversae res atque erudierunt ut rationem sequi quam fortunam malim;

こういった文は、ハンニバルがこの時まで fortuna に依存して戦って来たことをはっきり示しているが、この文章からは、ハンニバルが fortuna に依存してきた今までの行動は、すべて軽率無思慮であって、その理由は ratio が欠けていたからだ、とも解釈できる。このハンニバルの陳述でも fortuna や ratio の上位に神々がいることは指摘されていない。

ここに至り今までのハンニバルの全行動を念頭におくと、上記の引用文は表面的には全てを計算し尽くして、巧みにローマを引き込む形で戦争に踏み切ったハンニバルも実はその奥では肯定的面が強いとはいえ、盲目的な fortuna の作用に身を委ねていたのだということを、最終的にはっきりさせてくれる内容である。

ハンニバルは、virtus と pietas と felicitas で築き上げた現在のスキューピオーの立場を、往時の自分の立場と同質化し、運命、武運の移ろい易さを強調してスキューピオーに警告を与えたりしてもいる。このようなハンニバルの発言をも念頭に置くと、リーウィウスはハンニバルの弁論の中で、明にも暗にも fortuna を際立たせている。

一方既に述べたように、宗教的確心に満ちたスキューピオーにとって、神性は fortuna の上に位置し、それは盲目的でも移り気でもない。その神性は、多少

ストア主義的面も感じさせ、その神性に従う者は、目的の成就が可能になる。スキピオの弁論の長さは、ハンニバルの弁論の3分の1ほどであり、この短さによりハンニバルが行った和平提案に対するスキピオの拒否の鋭さが印象づけられる。

証言者としての神々につき、スキピオは次のように述べる。

30,31,5: di testes sunt qui et illius belli exilium secundum ius fasque dederunt et huius dant et dabunt.

過去、現在と共に未来にまで言及したことで、恒久的で変化のない法則に従って進むストア主義的決定論の性格を有する神々の深遠な世界支配と、スキピオのローマ的な宗教上の確信をリーウィウスが融合させているかのような様子を呈しており、ハンニバルが依存していた規則性のない fortuna と対照的である。

今まで不明であった様々な点がここで明らかとなった。そしてザマの決戦後、この戦争全体を総括するような、宗教性を帯びたスキピオの次の言葉が、カルタゴから来た使節に発せられる。

30,37,1: Postero die revocatis legatis et cum multa castigatione perfidia monitus ut tot cladibus edocti tandem deos et ius iurandum esse crederent.

正に内面的宗教性に於けるスキピオの勝利宣言である。

## 5章

### 総括と結論

ホラーティウスは、『エポード』16の中でローマを2回、「呪われた国」“exsecrata civitas” (vv.18,36)と呼び、ローマを神に捧げられたものと記述



して、quam(sc. Romam)・・・impia perdemus devoti sanguinis aetas と書いている。又『エポード』7では、sic est: acerba fata Romanos agunt / seculusque fraternae necis, / ut immerentis fluxit in terram Remi / sacer nepotibus cruor.(17~20)と書いている。これらの詩句に表現されているのは、ローマ建国時に、当の建国者のロームルスが行った弟殺しにさかのぼる原罪思想と、ローマを神に捧げる Devotion の考えである。又『エポード』7,13では、盲目的な狂気の沙汰として内乱について触れ、悲惨な結果としてローマの没落という雰囲気満ちている。これと共通或は類似した考えは、リーウィウスの著作の Praefatio にも見出すことができる。この陰うつな雰囲気から人々を解放し、市民戦争を終結させ、外敵を排除し、ローマに真の恒久的平和をもたらした(或いはそのように見えた)のがアウグストゥスである。彼は、ホラティウスの言うローマの呪いを根絶し、神々の恵みを仲介する人物で、Devotion の行為者として有名なデキウスと同様天からの使者であった。アウグストゥスの中にロームルスが蘇るが、それは弟殺しという罪を清算した者として、自分の国民や世界を救済するために蘇ったのである。このような思想は、ウェルギリウスの『エクロガ』4,13ff や『ゲオールギカ』1,501などに顕著である。リーウィウスの場合、彼の Praefatio では、ペシミズムの色彩がやや濃いだが、アウグストゥス時代の歴史著述家として、凡そロームルス以来呪われたローマと、アウグストゥスにより解放されたローマという二つの考え方が同居していたであろう。

このような思想の中で、リーウィウスの著作、とりわけ 21~30 巻のハンニバル戦争は、どのように位置づけられるであろうか。

建国当初の兄弟殺しという原罪をローマは負うてきた。確かにローマは、宿命により建国され(1,4,4: Sed debebatur, ut opinor, fatis tantae origo urbis maximique secundum deorum opes imperii principium.)、神々の保護の

下で発展するよう運命づけられていた。しかし原罪の為、そして世界の支配者となるための様々な試練がローマに神から課される。第一 Decade(1~10巻)までの内容が、ローマを次々に襲う内憂外患の繰り返しに満ちている<sup>(12)</sup>。外部民族との戦争、国内の階級闘争そして疫病が次々とローマにふりかかる。しかしこれらが一度にローマを襲うことはない、それはローマを滅ぼさないためであり、神意である<sup>(13)</sup>。それと同時に、窮地に陥ったローマを救う人物が登場し、それはカミッルスであったり、デキウスの Devotion であったりする。

私は、このような考え方の延長上に、リーウィウスの第三 Decade のハンニバルとの戦争を考えたいのである。ハンニバルとの第二次ポエニ戦争は、その時までローマを襲った災のうち最大のものであり、リーウィウスは、10巻をその災の記述に費した。

するとこの第三 Decade の構成と同時に、ハンニバルやスキピオの占める位置もはっきりしてくる。ハンニバルは、この Decade の最初から最後まで登場してローマと戦うが、スキピオは、後半の Pentade の最初に、神がかり的な登場をする。又宗教的内面性に目を向けると、さきに示したように、ハンニバルは、10巻を通じて殆ど変化していない。そしてそのハンニバルに対してローマ側から次々と将軍が登場するが、彼ら一人一人は、それぞれ異なった宗教的内面性を有する。ローマ軍が連戦連敗をする、最初の Pentade に登場する将軍達は、伝統的で凡庸な宗教性を帯びているか、ferocia や temeritas といった悪徳を身につけ、或はフラミニウスのように神に対し neglegentia を以って臨む。持久戦でハンニバルを苦しめたファビウスは、ratio で特色づけられる。最初ファビウスは、作戦上他のローマの将軍達と対立するが、スキピオが登場すると、ファビウスは彼と作戦上対立する。更にその一人一人が、ハンニバルに対抗してゆく。これらの対峙や対抗は、作戦上或は戦争といった外面的な要素ばかりでなく、同時に宗教的な内面的対立という要素を大い

に持っていることがわかる。ローマ的凡庸さ、悪徳、ratio の次に登場したスキピオの神性こそが、ローマの救済者として、ハンニバルを、外面的な戦争に於いても又内面的な宗教性に於いても初めて凌駕し上まわったのであり、リーウィウスは、その記述を後半の Pentade に割り当てた。この意味に於いて、スキピオは、ロームルスやアウグストゥスほどではなくとも、神からローマに課された一大試練の救済者として高い神性を持つと同時に、アウグストゥス的 Devotion を行ったのであり、即ち生きながら戦争に勝利を収め、更にローマの原罪を幾分か軽減せしめたのである。ローマにとって真の救済者とは、リーウィウスにとって神性を帯びていたり、又は神と密接な関係を持たねばならないかもしれない。

## 注

\* 引用テキストには OCT を使用した。

(1) Cic. div. I. 49.

(2) Cf. Laistner, M.L.W., The greater Roman Historians. Univ. of California Press 1947, 69.

(3) 8, 63; 24, 10, 6; 27, 37, 1; *ibid.* 32, 2.

(4) Cf. Cic. div. 1, 77.

(5) 詳しくは、Walbank, F.W.A., A Historical commentary on Polybius. Volume I. Oxford 1970, 16ff 参照。

(6) 'scripsit enim et dialogos quos non magis philosophiae adnumerare possis quam historiae, et ex professo philosophiam continentis lib-

ros' (Ep. 100, 9).

(7) Walsh, P.G., *Livy and Stoicism*. AJP 79(1958), 355~75.

(8) Cf. Stübler, G., Die Religiosität des Livius. Stuttgart-Berlin, 1941, 109.

(9) *Pestis et ira deum*; Verg. Aen. 3, 215.

(10) Cf. Wege zu Livius. hrsg. von Burck, E. Darmstadt, 480.

(11) この点で、神がリーウィウスにとってデカルト的の神であったか、パスカルの神であったかにより、記述態度が分かれる。デカルト的合理主義的の神を主張するのは、Bayet, J., Tite-Live. (Bude) Tome I, xxxix であり、逆にリーウィウスがローマの伝統的宗教に鼓舞されていたと主張するのは、Stubler, op. cit., 205、両者の折衷的立場をとるのが、Walsh, art. cit. である。

(12) Walsh, P.G., Livy, his Historical Aims and Methods. Cambridge 1961, 52ff 及び、Dutoit, E., *Quelques généralisations de portée psychologique et morale dans l'histoire romaine de Tite-Live*. REL 20(1942), 98~105, esp. 102.

(13) Ibid.